

National Statistical Office, Office of the Prime Minister, Government of Thailand: *Statistical Yearbook of Thailand*, Number 24, 1963. National Statistical Office, Bangkok, 1964. 496p.

地域研究にさいしての基礎的な資料は、いうまでもなく地図と統計とである。低開発国における統計の信頼性については、大いに問題とされるところである。しかし、たとえその信頼性がどうであれ、なんらかの、まとまった全国統計は、その国の理解のためのあしかりとなる。統計がでていうことと、その統計の信頼性とは一応きり離して考えるべきだ。往々、「統計はあてにならない」といいきって、既発表の統計の収集に努力しないような研究態度は、地域研究者として戒められねばならないであろう。

さて、タイは、東南アジアにおいては、比較的統計の整備された国である。このタイの全国統計の最もまとまったものが、ここに紹介するタイ国統計年鑑(第24巻)1963年版である。

すでにタイ国統計年鑑は3巻まで出版されてきたが、この1963年版から総理府国家統計局によって刊行された。これは従来は国家経済開発庁中央統計局によって出版されていたが、統計局が総理府直属に改組されたためである。

本巻は既巻のものと同じく、人口・行政・経済活動・社会事情等の全国的統計をふくめ、この国の主要統計を網羅している。しかし、本巻では、既巻とは異なり、面積・地理・気候・人口・教育・農業・外国貿易・財政・通貨銀行などが、詳しくなっている。しかも、統計局は主として人口統計と家計費調査とを担当し、それ以外のデータは、各担当省や部局のそれによっている。

その内容はつぎの大項目からなる。

1. 面積・地理および気候
2. 人口
3. 公衆衛生と出生死亡
4. 移入民と国籍取得
5. 教育
6. 司法
7. 協同組合
8. 農業

9. 漁業
10. 林業
11. 鉱業
12. 運輸通信
13. 外国貿易
14. 通貨と銀行
15. 物価
16. 財政
17. 政府職員
18. 国民所得
19. 家計費調査

わたくしは、これらの統計をしばしば使用するが、よくぞここまでタイの政府機関がここまで統計を整備するに至ったかと思うと、その努力を高く評価せざるをえない。そしてまた本統計書をタイ研究のための基本的資料として広く推賞したいと思う。もちろん、この統計書は政府出版物として非売品である。だから、ここにこれを紹介しておくことが、とくに必要だと思われる。(本岡 武)

Paul Sithi-Amnuai: *Finance and Banking in Thailand, A Study of the Commercial System, 1888-1963*. Thai Watana Panich, Bangkok, 1964. xvi + 224p.

タイ国経済の安定性と成長率は、低開発国のなかで、高く評価されている。低開発国の経済発展についての制約として、低貯蓄—低投資の悪循環が指摘される。この悪循環をもたらすことの、ひとつの理由として、金融制度なり、銀行制度の未発達なことがあげられる。

この銀行制度、とくに商業銀行制度について、1888年(タイにおける最初の商業銀行が創立せられた)から1963年に至るまでの歴史的研究と現状分析とをあわせたのが、本書である。これは、タイ経済の理解のためのみならず、後進国経済開発のための実証的研究として、重要な収穫だと思われる。

主著者 バンコク銀行副頭取 ポール・シティーアムニューアイ氏を中心とする同銀行の調査部員によって、本書はまとめられている。

まず第1章はタイ経済の概要を要領よくまとめてある。とくに、その終わりに、タイ経済の前途につい

て、「政治的要素がタイの経済発展にたいし最も重要な役割を演ずることが記憶されるべきである。賢明な政策立案があるかぎり、タイ経済の前途は明るいであろう」と指摘していることに、わたくしは強く同意する。第2章では1881年から大東亜戦争勃発までの金融・銀行の発展を述べる。第3章は日本の実質的な占領下における銀行制度であり、軍事占領と金融との関係は興味深い。第4章は戦後の金融と銀行制度の発展であって、とくにインフレをできるだけいとめ、通貨の安定をもたらしたタイ国政府の努力は高く評価されよう。つづいて現状分析となり、第5章はタイ国立銀行と現在の諸商業銀行の説明、第6章は商業銀行の支店組織についての説明、さらに第7章は商業銀行法の解説、最後に第8章は近代的な商業銀行のありかたを述べる。末尾にタイ国商業銀行についての統計と、タイ経済にかんする文献がおさめられている。

専門外のわたくしが本書を紹介したひとつのゆえんは、ともすれば現地出版のものは、わが国に紹介されていない傾向があることを考えたためである。しかし、これだけの、まとまったタイの金融・銀行についての研究が、タイ人の手により、しかもこれだけきれいにタイで印刷出版されていることで、ぜひ紹介したいという強い気持があるためでもある。

だが、1964年6月30日という最も新しい貸借対照表を見るに、タイの商業銀行（タイで設立16行、外国本店のもの13行、計29行）の、資産総合計が15,811百万バーツ（765百万ドル）にすぎず、また最大の資産をもつバンコク銀行のそれが3,502百万バーツ（170百万ドル）にすぎないのである。いかにこの国においてさえ、商業銀行の発達がおくれているかが明らかであろう。（木岡 武）

Michael Brecher: *The New States of Asia, A Political Analysis*. Oxford Univ. Press, 1963.

とくにアジアの新興国家の場合には、その政治の理解は国内政治と国際政治を総合したアプローチを取ることが必要である。それらの国家は、それ自身の力は弱く、それを取り囲む環境の圧力はたかいからである。ネールの秀れた伝記の著者 Michael Brecher のこの著書は、そのアプローチを試みたものとして、アジアの新興国の政治を理解する良い手引であると言う

ことができる。

彼は第1章において、植民地主義からこれらの国家が独立する過程を歴史的に描写したあとで、第2章では現在の政治の不安定を研究する。貧困、積年の政府への不信、政治的エリートの中の分裂に加えて、これらの国が独立の時に採用した立憲民主体制は、いささか非現実的であった。国民には民主主義の経験はなく、社会は数年前の戦争と革命の動乱の後で混乱しており、しかも政治秩序を保つために必要な人力、とくに訓練された官僚が不足している。さらに、ビルマやセイロンなど多くの国家はかなり強力な少数民族を統合することに成功していないために、国内はさらに安定を欠いてしまう。そして何よりも、政治的決定に時間がかかる民主主義は、急速な工業化を望むこれらの国の指導者の気持と合致しないものである。こうした理由から1958年ごろから、西欧民主主義への批判が公然となされ、軍部が抬頭し始めたのであった。しかし、その政治は依然として安定をみていない。

しかも、これらの国家は新らしく得た地位を守ることのみ熱心で、必要とされる国家間の協力はきわめて僅かである。著者は第3章において、東南アジアの国際関係を世界政治における「従属的システム」(Subordinate state system) と考え、その特徴を、(1) その国力の弱さ、(2) 地域を統合する機関の不足、(3) その構成メンバーの間の統合の欠如をあげ(それはコミュニケーションと輸送の不足と関係する)、その結果としてシステムが「支配的システム」によって浸透されていると言う。第6章もまた同じような問題をやや詳しく、そしていささか描写的に扱っているが、そこでも著者は東南アジアが他の領域からの圧力に押される「低気圧地帯」だというコラ・デュ・ボアの意見に賛成し、東南アジアは第1次世界大戦前のバルカンに似ていると言う。その貧困さを考えると、「東南アジアは未来の世界のアキレス腱である」という著者の言葉は、傾聴に値する警告であると言えよう。（高坂正麿）

Hanks, Jr. L. M.: *Merit and Power in the Thai Social Order*, American Anthropologist, vol. 64 (1962), No. 6, 1247-1261.

センター関係の方々が接触されることの多いタイ国人についてのべた論文にめぐり合ったので紹介しよ